

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：14701

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26882037

研究課題名(和文)身体活動の阻害要因とその折衝方法が心理的健康に及ぼす影響に関する日加文化比較研究

研究課題名(英文) Cultural similarities and differences in the effects of constraints to and constraint negotiation of leisure-time physical activity on psychological well-being

研究代表者

伊藤 央二 (ITO, Eiji)

和歌山大学・観光学部・講師

研究者番号：00736861

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：研究目的：日加間における身体活動の阻害要因(参与・その楽しみを妨げるもの)ならびに阻害要因折衝(阻害要因の影響を回避、軽減するための手段)の類似・相違点を精査すること、身体活動の阻害要因と阻害要因折衝が人々の心理的健康に与える影響を文化別に精査すること。

結果：日本人はカナダ人よりも活動種目要因で、カナダ人は日本人よりも時間的要因で身体活動が阻害されていた。日本人はカナダ人よりも活動種目(マネジメント)の面から、カナダ人は日本人よりも金銭的・時間的な面から阻害要因を折衝していた。両文化において、心理的健康に身体的阻害要因がネガティブな影響を、対人関係折衝がポジティブな影響を与えていた。

研究成果の概要(英文)：The purposes of this research were to examine: (a) cultural similarities and differences in constraints to and constraint negotiation of leisure-time physical activity between Japanese and Euro-Canadians; and (b) the effects of constraints to and constraint negotiation of leisure-time physical activity on psychological well-being cross-culturally.

The results indicated: (a) Japanese leisure-time physical activity was constrained by activity-specific constraints more and by time constraints less than the Euro-Canadian counterpart; (b) Japanese leisure-time physical activity was facilitated through activity-specific (management) negotiation more and financial and time negotiation less than the Euro-Canadian counterpart; and (c) physiological and physical fitness constraints and interpersonal negotiation negatively and positively, respectively, influenced psychological well-being in both cultures.

研究分野：余暇・レジャー学

キーワード：身体活動 余暇時間 阻害要因 阻害要因折衝 心理的健康 文化比較 日本 カナダ

1. 研究開始当初の背景

2011年に公布、施行されたスポーツ基本法に「野外活動及びスポーツ・レクリエーション活動の普及奨励」が掲げられているように、スポーツだけではなく余暇時間における身体活動全般の振興が求められている。しかしながら、レジャー白書(日本生産性本部、2013)の余暇活動種目の上位20種目のうち、余暇時間における身体活動(以下、身体活動とする)は15位の「ジョギング・マラソン」、18位の「体操(器具を使わないもの)」、20位の「ピクニック、ハイキング、野外散歩」のみであった。身体活動が我々の心理的健康を促進することを考慮すると(e.g., 甲斐ら、2009)、スポーツ基本法に掲げられているように身体活動を振興する必要性が考えられる。

身体活動参加の促進を考える上で、主に促進要因と阻害要因といった2つのアプローチ方法が考えられる(荒井・中村、2009)。長ヶ原(2003)はこの2つの要因は独立するものであり、身体活動の促進は正の面の促進要因だけではなく、負の面の阻害要因にも着目する必要があることを指摘している。しかしながら、国内においては促進要因が頻繁に焦点を当てられ、阻害要因に関する理論に基づく体系的な研究はほとんど行われていない。国内では身体活動の促進を考える上で、これまで促進要因という正の面に焦点が置かれてきたが、逆の負の面である阻害要因は等閑視されてきた傾向にある。

欧米の余暇・レジャー学では、1980年代から阻害要因(constraints)ならびに阻害要因折衝(constraint negotiation)という視点から身体活動を含む余暇・レクリエーション活動の振興について議論してきた。阻害要因とは余暇活動の参与・その楽しみを妨げるものや個人の余暇活動の選好の構築を制限する要因であり(Jackson, 2000)、阻害要因折衝とはそのような阻害要因の影響を回避、軽減するための手段である(Jackson et al., 1993)。阻害要因は主に「個人的」、「対人的」、「構造的」の3要因(Crawford & Godbey, 1987)に分類され研究されてきたが、近年では本当に阻害要因がこの3要因に分類されるのかといった議論がされている。具体的には、Casper et al. (2011)は彼らのデータ分析において、3要因モデルよりも7要因モデルの方が当てはまりが良かったことを報告している。Dong and Chick (2012)も分析結果から8要因モデルが導き出されたことを報告している。阻害要因折衝も、これまでは主に「認知的」と「行動的」の2種類的手段に分類され研究されてきたが(Jackson et al., 1993)、この2分化が実際の阻害要因折衝を捉えきれているのかといった懐疑的な意見も見受けられる。また、阻害要因・阻害要因折衝には文化が大きく影響することが報告され(Chick & Dong, 2005; Liang & Walker, 2011; Walker & Virden, 2005)、西洋以外の

文化背景を踏まえた阻害要因・折衝理論の発展が求められている(Ito et al., 2014)。そこで本研究では、研究1として、Ito and Walker (2014)の「余暇・レジャーの10答法」を用いて、帰納的に阻害要因ならびに阻害要因折衝の要因を明らかにすることとした。

同様にMannell (2007)は、我々の健康増進に及ぼす余暇活動全般(身体活動含む)の影響が世界共通であるかを検証するためにも文化比較研究の実施を推奨している。前述したように、身体活動が我々の心理的健康を促進するならば(e.g., 甲斐ら、2009)、心理的健康に対して阻害要因はネガティブな影響を、阻害要因折衝はポジティブな影響を与えることが予測される。そこで本研究では、研究2として、阻害要因ならびに阻害要因折衝が心理的健康にどのように影響を与えるのか明らかにすることとした。

2. 研究の目的

上述した先行研究の検討を踏まえた上で本研究では2つの日加文化比較研究を通して、日加間における身体活動の阻害要因ならびに阻害要因折衝の類似・相違点を明らかにすること(研究1)、身体活動の阻害要因と阻害要因折衝が人々の心理的健康に与える影響を文化別に精査すること(研究2)を目的とした。

3. 研究の方法

(1) 研究1

オンライン調査法を用いて、20歳以上の日本人とカナダ人を対象に調査を実施した。質問項目として、調査参加者の属性の他、Ito and Walker (2014)が開発した「余暇・レジャーの10答法」を本研究に合わせ修正した項目を用いた。具体的には、調査参加者に「自由時間に身体活動を行おうとした時、どのような問題を経験しましたか?」という質問に対して「私の問題」から始まる5つの異なる文を書き出すよう依頼した(阻害要因)。続いて、「それらの問題を解決するためにどのような方法をとりましたか?」という質問に対して「私の解決方法」から始まる5つの異なる文を書き出すよう調査参加者に依頼した(阻害要因折衝)。

データ分析として、得られた自由回答のデータを研究代表者およびもう一人のバイリンガルの日本人研究者と内容分析を実施した。まず、文化ごとに、得られた全体の自由回答数の約10%に当たる68の阻害要因、60の阻害要因折衝に関する自由回答の内容分析を実施し、研究者間で議論を踏まえカテゴリーを作成した。その後、作成されたカテゴリーを基に残りの自由回答を研究代表者がコーディングした。コーディングの信頼性を検証するために、日英バイリンガルの日本人に単独でのコーディングを依頼した。コーディング結果の不一致は、研究代表者とバイリンガルの日本人研究者間で議論を行い、最終

的なコーディング結果を決定した。なお、同じ回答の繰返しは1つ目のみの回答をコーディングすることとした。また、自由回答が2つ以上のカテゴリーに分類されると判断した場合は、メインカテゴリーとサブカテゴリーに分けてコーディングすることとした。

最後に、各カテゴリーの比率を算出、逆正弦変換をし、文化(日本 vs. カナダ)を独立変数、各カテゴリーの逆正弦変換された比率を従属変数としたホテリングの T^2 検定およびフォローアップ t 検定を阻害要因、阻害要因折衝別々に行った。なお、フォローアップ t 検定の有意確率にはボンフェローニ調整を行った $0.006 (= 0.05/9)$ を用いた。また、サブカテゴリーを使用して分類された回答が阻害要因は12、阻害要因折衝は13のみであったため、メインカテゴリーに分類された結果のみを用いてデータ分析を行った。

(2) 研究2

研究1同様、オンライン調査法を用いて、20歳以上の日本人とカナダ人を対象に調査を実施した。研究1で明らかとなった阻害要因と阻害要因折衝のカテゴリーに関して専門家レビューを通して開発した尺度を用い、阻害要因と阻害要因折衝を測定した。心理健康に関しては、協調的幸福感 (Hitokoto & Uchida, 2015) と人生満足度 (Diener et al., 1985) の尺度を援用した。

データ分析として、文化別に阻害要因と阻害要因折衝を独立変数、協調的幸福感と人生満足度を従属変数としたステップワイズ法の重回帰分析を行った。ステップワイズ法の有意確率には、ボンフェローニ調整を行った投入 $0.003 (= 0.05/9)$ と除去 $0.006 (= 0.10/9)$ を用いた。

4. 研究成果

(1) 研究1

日本で324名とカナダで327名の合計651名から回答を得ることができた。そのうち、日本人ではなかった6名ならびにヨーロッパ系カナダ人でなかった88名の回答を削除した。加えて、有効な自由回答を1つも書き出さなかった日本人136名およびヨーロッパ系カナダ人28名をデータ分析より除外した。最終的に182名の日本人および211名のヨーロッパ系カナダ人のデータを内容分析に使用した。性別では、日本人の男性は44.0% ($n = 80$)、女性は56.0% ($n = 102$)であったのに対し、ヨーロッパ系カナダ人の男性は42.2% ($n = 89$)、女性は57.8% ($n = 122$)であった。平均年齢では、日本人が49.2歳、ヨーロッパ系カナダ人が47.1歳であった。婚姻状況では、日本人は独身が27.5% ($n = 50$)、既婚が68.1% ($n = 124$)、その他が4.4% ($n = 8$)であった。一方で、ヨーロッパ系カナダ人は独身が40.8% ($n = 86$)、既婚が54.0% ($n = 114$)、その他が5.2% ($n = 11$)であった。

自由回答の有効回答数は、日本人の阻害要因が567、阻害要因折衝が497であった。一方で、ヨーロッパ系カナダ人の阻害要因が771、阻害要因折衝が660であった。これらのデータの内容分析およびコーディングの結果から、9つの阻害要因(心理的要因、身体的要因、ライフスタイル要因、対人関係要因、金銭的要因、時間的要因、コミットメント要因、環境要因、活動種目要因)と9つの阻害要因折衝(心理的折衝、身体的折衝、ライフスタイル折衝、対人関係折衝、金銭的折衝、時間的折衝、活動種目折衝[調整]、活動種目折衝[マネジメント]、活動種目折衝[自己適応])の存在が明らかとなった。

次に、Tabachnik and Fidell (2013)の手順に従い、一変数の外れ値 ($n = 14$) と多変数の外れ値 ($n = 4$) をデータ分析より除外した。残った日本人171名、ヨーロッパ系カナダ人204名、計375名の回答を使い、ホテリングの T^2 検定を行った。ホテリングの T^2 検定が阻害要因 (Wilk's $\Lambda = .88$, $F(9, 362) = 5.70$, $p < .01$)、阻害要因折衝 (Wilk's $\Lambda = .90$, $F(9, 321) = 3.87$, $p < .01$) とともに有意であったため、続けてフォローアップ t 検定を行った。 t 検定の結果から、日本人はカナダ人よりも活動種目要因で身体活動が阻害されていたのに対し、カナダ人は日本人よりも時間的に身体活動が阻害されていた。一方で、日本人はカナダ人よりも活動種目(マネジメント)を折衝することで身体活動に参加しようとしていたが、カナダ人は日本人よりも金銭的・時間的な面から阻害要因を折衝していた。表1に文化別の阻害要因・阻害要因折衝のコーディング結果と t 分析の結果を示した。

表1. 文化別の阻害要因・阻害要因折衝のコーディング結果と t 分析の結果

カテゴリー	日本人		カナダ人		t -value
	%	(n)	%	(n)	
阻害要因					
心理的	16.0	(85)	18.7	(138)	0.91
身体的	33.4	(177)	39.2	(289)	1.12
ライフスタイル	3.2	(17)	2.2	(16)	-0.51
対人関係	3.0	(16)	3.5	(26)	0.94
金銭的	1.7	(9)	3.0	(22)	2.09
時間的	7.7	(41)	12.6	(93)	4.01*
コミットメント	8.1	(43)	8.8	(65)	-0.25
環境	10.8	(57)	6.6	(49)	-2.37
活動種目	16.0	(85)	5.3	(39)	-4.04*
阻害要因折衝					
心理的	15.2	(64)	19.7	(123)	1.08
身体的	13.5	(57)	7.9	(49)	-2.13
ライフスタイル	11.6	(49)	12.5	(78)	0.92
対人関係	3.3	(14)	5.3	(33)	2.27
金銭的	0.5	(2)	2.4	(15)	3.10*
時間的	6.7	(28)	11.6	(72)	3.08*
活動種目(調整)	21.9	(92)	22.8	(142)	1.06
活動種目(マネ)	13.3	(56)	5.9	(37)	-3.55*
活動種目(自己)	14.0	(59)	11.9	(74)	0.00

$p < .006$.

(2) 研究 2

309名の日本人と309名のヨーロッパ系カナダ人の合計618名から回答を得ることができた。研究1とは異なり研究2では、本調査の前にスクリーニングテストを行い、本調査の参加者をそれぞれの国の生まれ・育ちであり、なおかつ参加者とその両親もそれぞれの国の国籍を持つ者のみに限定した。加えて、カナダ人に関しては自身をヨーロッパ系カナダ人とみなす参加者のみに回答を依頼した。

Tabachnik and Fidell (2013) の手順に従い、一変量の外れ値 ($n = 15$) と多変量の外れ値 ($n = 18$) をデータ分析より除外した。残った日本人 299 名、ヨーロッパ系カナダ人 286 名、計 585 名の回答を使い、データ分析を行った。性別では、日本人の男性は 39.5% ($n = 118$)、女性は 60.5% ($n = 181$) であったのに対し、ヨーロッパ系カナダ人の男性は 41.3% ($n = 118$)、女性は 58.7% ($n = 168$) であった。平均年齢では、日本人が 49.2 歳、ヨーロッパ系カナダ人が 43.3 歳であった。婚姻状況では、日本人は独身が 44.8% ($n = 134$)、既婚が 55.2% ($n = 165$) であった。一方で、ヨーロッパ系カナダ人は独身が 42.0% ($n = 120$)、既婚が 58.0% ($n = 166$) であった。表 2 に各変数の平均値、標準偏差、アルファ係数を文化別に示した。

表 2. 文化別の各変数の平均値、標準偏差、アルファ係数

カテゴリー	日本人			カナダ人		
	M	(SD)	α	M	(SD)	α
障害要因						
心理的	2.51	(0.99)	.91	2.49	(0.91)	.86
身体的	2.65	(0.89)	.65	2.75	(1.03)	.85
ライフスタイル	2.32	(0.88)	.73	2.70	(0.89)	.74
対人関係	2.89	(0.78)	.43	2.81	(0.87)	.70
金銭的	3.35	(1.04)	.86	3.31	(1.06)	.90
時間的	2.85	(0.95)	.82	2.66	(1.01)	.89
コミットメント	2.93	(0.77)	.56	2.76	(0.88)	.78
環境	2.24	(0.74)	.84	2.32	(0.77)	.77
活動種目	2.63	(0.85)	.83	2.45	(0.90)	.87
障害要因折衝						
心理的	3.20	(0.82)	.87	3.53	(0.74)	.81
身体的	2.39	(0.72)	.60	2.79	(0.85)	.71
ライフスタイル	3.21	(0.84)	.78	3.44	(0.82)	.84
対人関係	2.50	(0.93)	.87	2.80	(0.95)	.86
金銭的	2.91	(0.78)	.64	2.88	(0.86)	.75
時間的	2.93	(0.85)	.80	3.20	(0.90)	.85
活動種目(調整)	3.62	(0.80)	.88	3.57	(0.75)	.79
活動種目(マネ)	3.38	(0.69)	.69	3.38	(0.79)	.78
活動種目(自己)	2.65	(0.84)	.83	2.80	(0.87)	.86
心理的健康						
協調的幸福感	3.09	(0.74)	.90	3.56	(0.68)	.90
人生満足度	2.54	(0.93)	.93	3.34	(0.88)	.90

文化別に 9 つの障害要因と 9 つの障害要因折衝を独立変数、協調的幸福感と人生満足度

を従属変数としたステップワイズ法の重回帰分析を行った。重回帰分析の結果から、両文化とも心理的健康に対人関係折衝がポジティブな影響を、身体的障害要因がネガティブな影響を与えていることが明らかとなった(表 3 参照)。

表 3. 重回帰分析の結果

独立変数	B	SE	β	t-value	p
協調的幸福感					
日本人					
対人関係折衝	0.28	0.04	0.35	6.39	0.00
身体的障害要因	-0.14	0.05	-0.17	-3.09	0.00
カナダ人					
対人関係折衝	0.25	0.04	0.36	6.77	0.00
身体的障害要因	-0.18	0.04	-0.27	-5.11	0.00
人生満足度					
日本人					
対人関係折衝	0.17	0.06	0.17	3.00	0.00
カナダ人					
身体的障害要因	-0.29	0.05	-0.34	-6.38	0.00
対人関係折衝	0.27	0.05	0.29	5.44	0.00

(3) まとめ

本研究の 2 つの日加文化比較研究の結果から、以下の 5 点が明らかとなった。

身体活動の障害要因として、心理的要因、身体的要因、ライフスタイル要因、対人関係要因、金銭的要因、時間的要因、コミットメント要因、環境要因、活動種目要因の 9 つの要因が認められた。

身体活動の障害要因折衝として、心理的折衝、身体的折衝、ライフスタイル折衝、対人関係折衝、金銭的折衝、時間的折衝、活動種目折衝(調整)、活動種目折衝(マネジメント)、活動種目折衝(自己適応)の 9 つの要因が認められた。

日本人はヨーロッパ系カナダ人よりも活動種目要因で身体活動が阻害されていた一方で、ヨーロッパ系カナダ人は日本人よりも時間的に身体活動が阻害されていた。

身体活動参加のために、日本人はヨーロッパ系カナダ人よりも活動種目(マネジメント)を折衝していた一方で、ヨーロッパ系カナダ人は日本人よりも金銭的・時間的な面から障害要因を折衝していた。

両日本・ヨーロッパ系カナダ人の心理的健康に対人関係折衝がポジティブな影響を、身体的障害要因がネガティブな影響を与えていた。

これまで主に障害要因は 3 要因(個人的、対人的、構造的)、障害要因折衝は 2 要因(認知的、行動的)の枠組みから研究が行われてきた(Crawford & Godbey, 1987; Jackson et al., 1993)。しかしながら、近年の先行研究の結果同様(Casper et al., 2011; Dong & Chick,

2012) 本研究結果からも3つの阻害要因、2つの阻害要因折衝に収まらない、各9つの要因が確認された。また、Casper et al. (2011) と Dong and Chick (2012) の研究と異なり本研究は文化比較研究であったため、身体活動の阻害要因・阻害要因折衝における日本とカナダでの文化的共通点と相違点を明らかにすることができた。このような文化的な相違点を考慮することで、日本やカナダにおいてより効果的な身体活動のプロモーション活動が可能となるだろう。

一方で、阻害要因・阻害要因折衝の心理的健康に及ぼす影響が日本とカナダとでは類似していた。経験する阻害要因・阻害要因折衝の「頻度」においては文化的相違点の確認されたにも関わらず(研究1)、阻害要因・阻害要因折衝の心理的健康に及ぼす「影響」において文化的共通点の確認されたこと(研究2)は非常に興味深い結果であろう。特に、心理的健康に対人関係折衝がポジティブな影響を、身体的阻害要因がネガティブな影響を与えていたことを考慮すると、身体活動を促進することが心理的健康を促進することに繋がるのが考えられる。Mannell(2007)が余暇活動全般(身体活動含む)と健康増進の関連の普遍性を明らかにするために文化比較研究によるエビデンスの蓄積が必要不可欠であると述べたように、今後は日本とカナダ以外の文化にも焦点を当てた文化比較研究が求められるだろう。

Schneider (2016) はこれまで阻害要因は40年近くかけて緻密に研究されてきたと述べるが、日本を含む非西洋の文化を対象とした研究知見は非常に限られている。具体的には、1990年から2009年の20年間に5つの世界的余暇・レジャー学術誌に掲載された学術論文を体系的にレビューした Ito et al. (2014) の研究において、阻害要因を研究テーマとした非西洋ならびに文化・国際比較研究は9つしか確認されなかったことが報告されている。このことを踏まえると、阻害要因・阻害要因折衝研究はいまだ未成熟(特に非西洋文化の脈絡において)の研究テーマだと言える。特に、日本での阻害要因・阻害要因折衝研究は非常に数が少ないため(伊藤ら、2016) 今後は理論的意義および実践的意義の両側面から、阻害要因・阻害要因折衝研究が国内で求められるだろう。

<引用文献>

荒井弘和、中村友浩(2009) 知的障害者の親における身体活動・運動実施の阻害要因と促進要因. 体育学研究、54: 213-219.

Casper, J. M., Bocarro, J. N., Kanters, M. A., Floyd, M. F. (2011) Measurement properties of constraints to sport participation: A psychometric examination with adolescents. *Leisure Sciences*, 33:

127-146.

Chick, G., Dong, E. (2005) Cultural constraints on leisure. In E. L. Jackson (eds.) *Constraints to leisure*. Venture Publishing, pp. 169-183.

長ヶ原誠(2003) 中高齢者の身体活動参加の研究動向. 体育学研究、48: 245-268.

Crawford, D. W., Godbey, G. (1987) Reconceptualizing barriers to family leisure. *Leisure Sciences*, 9: 119-127.

Diener, E. D., Emmons, R. A., Larsen, R. J., Griffin, S. (1985) The satisfaction with life scale. *Journal of Personality Assessment*, 49: 71-75.

Dong, E., Chick, G. (2012) Leisure constraints in six Chinese cities. *Leisure Sciences*, 34: 417-435.

Hitokoto, H., Uchida, Y. (2015) Interdependent happiness: Theoretical importance and measurement validity. *Journal of Happiness Studies*, 16: 211-239.

伊藤央二、山口志郎、岡安功、北村薫、Walker G. J. (2016) 青年の野外レクリエーションの参加動機と阻害要因が野外レクリエーション参加に与える影響: 日本とカナダの文化的類似・相違点の比較検討. 体育学研究. 早期公開. https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjpehss/advpub/0/advpub_15026/_article-char/ja/

Ito, E., Walker, G. J. (2014) Similarities and differences in leisure conceptualizations between Japan and Canada and between Japanese leisure-like terms. *Leisure/Loisir*, 38: 1-19.

Ito, E., Walker, G. J., Liang, H. (2014). A systematic review of non-Western and cross-cultural/national leisure research. *Journal of Leisure Research*, 46: 226-239.

Jackson, E. L. (2000) Will research on leisure constraints still be relevant in the twenty-first century? *Journal of Leisure Research*, 32: 62-68.

Jackson, E. L., Crawford, D. W., Godbey, G. (1993) Negotiation of leisure constraints. *Leisure Sciences*, 15: 1-11.

甲斐裕子、永松俊哉、志和志志、杉本正子、小松優紀、須山靖男(2009) 職業性ストレスに着目した余暇身体活動と抑うつとの関連性についての検討. 体力医学、107: 1-10.

Liang, H., Walker, G. J. (2011) Does "face" constrain Mainland Chinese people from starting new leisure activities? *Leisure/Loisir*, 35: 211-225.

Mannell, R. C. (2007) Leisure, health

and well-being. *World Leisure Journal*, 49: 114-128.

日本生産性本部 (2013) レジャー白書 2013: やめる理由は始める理由—余暇活性化への道筋. 日本生産性本部.

Schneider, I. E. (2016) Leisure constraints and negotiation: Highlights from the journey past, present, and future. In G. J. Walker, D. Scott, M. Stodolska (eds.), *Leisure matters: The state and future of leisure studies*. Venture Publishing, pp. 151-161.

Tabachnick, B. G., Fidell, L. S. (2007) *Using multivariate statistics* (5th ed.). Allyn and Bacon.

Walker, G. J., Virden, R. J. (2005) Constraints on outdoor recreation. In E. L. Jackson (eds.) *Constraints to leisure*. Venture Publishing, pp. 201-219.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

伊藤央二、山口志郎、岡安功、北村薫、Walker G. J. (2016) 青年の野外レクリエーションの参加動機と阻害要因が野外レクリエーション参加に与える影響: 日本とカナダの文化的類似・相違点の比較検討. *体育学研究*. 早期公開. 1-17.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjpehss/advpub/0/advpub_15026/article/-char/ja/ 査読有.

伊藤央二、山口志郎、岡安功、Walker, G. J. (2015) 積極的対応と消極的対応グループ間の野外レクリエーションにおける阻害要因の類似・相違点について. *生涯スポーツ学研究*, 12(2), 25-33. 査読有.

[学会発表](計3件)

Ito, E., Kono, S., & Walker, G. J. (February 17th, 2016) Cultural similarities and differences in constraints to leisure-time physical activity between Japanese and Euro-Canadians. 12th Biennial Australian and New Zealand Association for Leisure Studies Conference, Adelaide (Australia).

Ito, E., Kono, S., & Walker, G. J. (December 10th, 2015) Cultural commonalities in constraints to leisure-time physical activity between Japanese and Euro-Canadians. The 5th Asian Forum for the Next Generation of the Social Sciences of Sport 2016, Mokpo (Republic of Korea).

伊藤央二、山口志郎、岡安功、Walker, G. J. (2015年10月31日) 野外レクリエーションにおける阻害要因に関する研究: 参加者と非参加者の類似・相違点に着目して. 日本生涯スポーツ学会第17回大会、鹿屋体育大学(鹿児島県・鹿屋市).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 央二 (ITO, Eiji)

和歌山大学・観光学部・講師

研究者番号: 00736861